

わがまち紹介



大洗町

幸せ無限大・不幸ゼロのまち大洗

持続可能なまちづくりを目指して

2020年9月に町長に就任しました。1期目のスタート時は、コロナ禍の真ただ中でした。

任期の前半は、イベントの中止や事業の執行停止など、平常時にはみられないような難しい判断を求められることも多々ありました。

しかし、非常時や災害時に真価を発揮できるかどうか、行政の手腕の間われるところです。最初の数年は将来への種まきの時期ととらえ、町の現状の把握と今後進むべき道の模索を徹底的に行いました。

また、コロナ禍を転換期と捉え、事業や事務手続きを必要あるもの、ないものに仕分けをしました。不必要なものも数多くあり、たとえば書面で決議するような会議を中心に取捨選択いたしました。

後半には多くの事業に着手し、一定の成果を得ることができました。事業執行の前提として徹底したのは、町民の皆さんとの「合意形成」です。

合意形成には、大洗町の現状と課題について町民の皆さんと「共通認識」を持つことから始まります。

人口減少・少子高齢化や財政状況に関する課題、

港湾や原子力施設を有する本町特有の課題などを共有するため、町報やホームページなどあらゆる媒体を通して情報公開を徹底いたしました。

茨城県を代表する観光のまちという特性から、ごみ処理や上下水道などのインフラは、人口に比して大きめのキャパシティ確保が必要で、現在更新の時期を迎えております。2024年3月には古い水道管から漏水し町内ほぼ全域で断水や濁水が発生しました。水道は町民の生活に欠かせない重要な生活インフラであることから、老朽化した水道管の更新にスピード感をもって取り組んでいます。

2024年9月から2期目に入り、現在、2025年度からスタートする「総合計画中期基本計画」の策定を進めています。策定にあたります委員の皆さんには、前期計画の踏襲、手直しという慣例にとらわれず、ゼロベースからの議論をお願いしています。

まちづくりの主役である住民の皆さんから選ばせていただいた委員の皆さんには、「自己決定・自己責任・自己負担」という自治の三大原則に基づき、町の現状を踏まえ、少なからずご苦勞をおかけいたしますが夢や希望にあふれた計画をつくり上げてほしいと願っています。



株式会社筑波銀行
大洗支店長
高橋 利明

大洗町長
國井 豊氏

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとのつながりを深めるべく取り組んでいます。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。今回は茨城県大洗町です。筑波銀行大洗支店長 高橋 利明が大洗町長 國井 豊氏にお話を伺いました。

安心・安全なまちづくり

2期目の重要施策の一つは、「安心・安全なまちづくり」です。主な事業として、堀割・五反田周辺地区の「防災集団移転促進事業」と「火災検知 AI カメラの設置」が挙げられます。

堀割・五反田周辺地区防災集団移転促進事業

2024年度から国の「防災集団移転促進事業」を活用し、堀割・五反田地区のうち、災害危険区域に含まれる72戸すべてを市街地の空き地などに移転する事業を進めています。

防災集団移転は、これまで東日本大震災により岩手・宮城・福島各県で大規模に行われた例がありますが、災害の発生前に防災集団移転を展開したのは、島根県美郷町の5戸のみです。

事業に着手する際、わたしは対象世帯すべてを訪問しました。住民の皆さんに事業の重要性和町の本気度を知っていただくためです。おかげさまで皆さんから信頼をいただき、全72戸で合意を得ることができました。この規模の合意形成ができたのは全国で初めてのことで、モデルケースとして注目を集め国や県から大きな支援を得ています。

2024年6月28日には、国土交通大臣から事業計画の同意をいただきました。今後の課題としては、移転先の土地や住宅の確保などがあります。移転対象者には長年住み慣れた土地で暮らしてきた高齢の方も多いため、その痛みや思いにしっかりと寄り添い、スピード感を持って取り組み、満足度の最大化を図ることを求めています。2024年度中に10戸が移転を開始する予定で、10年後の事業完了を目指しています。

火災検知 AI カメラの設置

2024年11月には、大洗町消防本部の地上17mにカメラ「火の見櫓 AI」を設置し、その映像をAIが分析して火災を自動検知するシステムを導入しました。消防本部で同様のシステムを導入したのは本町が全国で初めてです。

カメラは半径800mを360度見渡すことができ、AIが火災の煙を検知すると消防本部の通信司令室に異常を知らせる仕組みになっています。システムの導入により、火災の早期発見、迅速な消火活動、被害の拡大防止につながっていきます。

機能の充実により、行政面積の小さい本町であれば全戸を網羅することもできます。さらに認知症高齢者の見守りや渋滞対策、また、自動車の盗難が多い茨城県の現状を踏まえ、盗難を防止するなど、将来的な活用の可能性が期待できます。

そのほかにも東日本大震災を受け、茨城県が津波対策の一環として進めてきた茨城港大洗港区の防潮堤の工事が2024年6月末に完了しました。10月には

東海第二原発の万一の原子力事故に備えた広域避難計画が決定しました。これも作成したら終わりではなく、常に最適化を図ってまいります。

イベント強化により 観光客数の平準化を図る

もう一つの重要施策は、観光のさらなる推進です。これまで本町の観光は、地元資本による観光資源の充実により発展してきました。しかし今後、国内海外を問わず旅慣れた観光客にも本町の観光を楽しんでもらうには、町外から人材や飲食店などの観光資源を導入し、より広い視野でおもてなしができる態勢を整えることが必要だと考えています。

夏に偏りがちな観光客数の平準化を目指し、大洗サンビーチを中心にイベントの強化に取り組んでいます。イメージは「野天版幕張メッセ」です。

新規のイベントとして、2023年3月にビンテージカーやバイクによるレース「サンビーチサンドフラッツ」、8月に「ひたちなか大洗リゾート構想」の一環でカジキ釣りの国際大会を開催しました。

2024年10月には、従来の「NIGHT WAVE 海のイルミネーション」を進化させた「光とあそぶ遊園地 NightPark OARAI」を開催しました。美しい光のアートと地元事業者によるローカルフードをお客様が楽しみ、大盛況でした。

本町を代表するイベントの「大洗海上花火大会」は、



photographer yuhei ueda

2024年9月に「大洗海上花火大会」の観賞のために寄港したクルーズ船「にっぽん丸」

2022年に日程を従来の7月の繁忙期から9月に移し、規模を拡大して実施しました。これまで3千発であった打ち上げ数は、2024年には1万5千発と増え、内閣総理大臣賞を最多の21回受賞された野村花火工業による花火がサンビーチの夜空を彩りました。音楽ライブの開催や国内最大規模のサウナ、キッチンカーの出店、クルーズ船の寄港もあり、会場は日中から大きなぎわいを見せました。

こうした特徴あるイベントを通して町の認知度を高めるには、いかに情報を発信するかも重要になってきます。イベントの主催者には、ビフォー、アフター共にイベントの写真や動画をHP等で発信してもらうようにしています。

港湾がある特徴を生かし、大洗港ではクルーズ船の発着や寄港等の誘致活動を積極的に推進しています。2023年からは「大洗海上花火大会」を船上から観覧するクルーズ船「につぼん丸」が定着したことで、大会がさらにオーソライズされ観光地「大洗」の飛躍につながることを期待しています。

東京など首都圏からのアクセスの良さを生かし、来遊客数増加のポテンシャルはまだまだあると考えています。可能な限りの施策展開を進めてまいります。

ふるさと納税推進による 財政基盤の強化

町長就任以来、「ふるさと納税」の取り組みを強化し財政基盤の確立を図ってきました。就任時に6千万円だった寄附額は、2023年度は過去最高となる14億4千万円を達成しました。いただいた寄附は基幹産業である漁業や観光、防災、教育など各事業に活用し、町民の皆さんの生活をより良くするために役立てています。

今後、克服すべき課題の一つには、いわゆるコト消費や着地型観光の伸び悩みが挙げられます。一方で、本町と友好都市協定を結んでいる栃木県那須町は着地型観光が8割を占めています。この件については検証を行い、有効なものを取り入れていきたいと考えています。

観光とふるさと納税は、本町のイメージアップのための「車の両輪」と考え、まずは30億円を目標に大洗の魅力を広くPRしてまいります。

特徴ある教育で 選ばれる学校づくり

本町では、小中学校における特徴ある教育実践の一つとして、英語教育に力を入れています。「英語が話せるまち大洗」の実現に向け、外国語指導助手(ALT)を各小中学校に2人ずつ計8人配置するほか、小5から中3を対象にフィリピン人講師との1対1オンライン英会話レッスンを実施しています。学習の効果は、英検の取得率や外国クルーズ船のおもてなしにも表れています。



1対1のオンライン英会話レッスン

もう一つ、子どもたちの教育の充実や健康増進につながると期待しているのが、2024年5月31日にアミューズメントパークやアトラクションの運営を手がける「CAセガジョイポリス」と締結した包括連携協定です。

連携の第1弾として2024年6月以降、町内の保育園や2つの小学校に室内型AR(拡張現実)機器「DIDIM(ディディム)」を導入しています。「頭脳トレーニング」「体力トレーニング」など約70種類のコンテンツがあり、ゲーム感覚でトレーニングできるのが特徴です。同社とは今後も連携を深め、共に子育て支援に取り組んでいきたいと考えています。

こうしたユニークな取り組みが、本町で育った子どもたちにとって貴重な体験となり、将来的には若年層の流出抑制、移住、定住につながることを期待しています。



DIDIM(ディディム)を体験する子どもたち

筑波銀行に期待すること

銀行の役割の一つは、地域の「潤滑油」となるより良いサービスを提供することだと考えます。筑波銀行さんにはいわゆるリテールバンクとして、身近な存在であると同時に、確かな信頼のもと尊敬の念を持って接してもらえようような存在感のある企業へ成長してほしいと願っています。そうなれば、町全体の成長につながっていくものと大きな期待を寄せています。

(取材日:2024年12月5日)

わがまちの

ふるさと納税 大洗町

このコーナーでは、「支店長のわがまち紹介」で取材させていただいた市町村の施策や事業、取り組みなどを紹介しています。



大洗町ふるさと納税
特設サイト

【お問い合わせ先】
大洗町まちづくり推進課
TEL:029-267-5109
MAIL:machidukuri2@town.oarai.lg.jp



明太子

厳選された成熟卵を秘伝のタレで漬け込みじっくり熟成したこだわりの逸品。ぷちぷち食感と程よい辛さが絶品で、ごはんのお供やお酒のおつまみに最適です。かねふくで最初にできた明太子専門テーマパーク「めんたいパーク大洗」は、明太子の魅力を体験できる施設として多くの観光客に人気です。



あんこう鍋

「西のふぐ、東のあんこう」といわれる冬の味覚、あんこう。あんこう料理は、大洗を代表する冬の名物料理であり、「あんこう鍋」が代表格。身・皮・エラ・ヒレなどあんこうを余すところなく使い、野菜と一緒に煮込みます。なめらかな味わいが特徴です。大洗町内には独自のあんこう料理を提供している飲食店があるため、さまざまな「あんこう料理」を楽しむことができます。



カニ

長い歴史を誇る水産加工会社がいくつもあり、長年の経験で培った確かな目利きで厳選した原料を、熟練の職人たちが丁寧に手作業で加工しています。プリっとした身がぎっしり詰まり、濃厚な甘みが楽しめるカニは、冬の味覚にぴったりです。



地酒

慶応元年創業の大洗の老舗酒蔵「月の井」が手掛ける純米酒「彦市」は、大洗で育ったお米「チヨニシキ」を使用した地元一貫造り。地元の気候風土を最大限に活かした蔵元渾身の純米酒です。大洗町のブランド認証品としても登録されており、お米の旨味を感じる柔らかな味わい、スッキリとした飲みやすさが特徴のお酒です。

しらす

大洗町は、しらす漁が盛んな地域として知られており、新鮮なしらすは地元の人はもちろん、観光客にも大人気です。大洗沖で獲れたしらすは鮮度抜群。しらすを活かした料理を提供するお店も多く、生しらすや釜揚げしらす、しらす干しなど、いろいろな大洗産しらすを存分に楽しむことができます。

